

ダニエルの書 - 第一百五十一号

神殿の象徴性：神と人間の結びつきの神秘を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-22

二本の棒は結ばれて一つの神殿となる。四十六という数は神殿の象徴であり、北王国の捕囚と南王国の捕囚を隔てる年数でもある。1798年、終わりの時に聖所と軍勢の踏みにじりが成就したとき、二本の棒を神殿として一つに結ぶのも四十六年である。紀元前723年から紀元前677年にかけて、神殿は打ち壊され、踏みにじられた。1798年にその踏みにじりは終わり、1844年までに神殿が建てられた。そこで彼らは一人の王のもとに一つの国民となり、永遠に罪を犯すことをやめるはずであった。それが計画であったが、1863年の反逆がその計画を2001年へと先送りにした。

パウロは、教会を「からだ」とし、キリストをその「かしら」と同定する。また、彼は「からだ」を「肉」の象徴として用いる。パウロにとって、「肉」と「からだ」は互換的に用いられる用語である。

なぜなら、もしあなたがたが肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬ。しかし、もし御霊によってからだの行いを死なせるなら、あなたがたは生きる。ローマ人への手紙 8:13.

人間の神殿の構造は、神の神殿の構造に基づいている。教会である「体」は、個人の神殿における「肉」に当たる。個人の神殿においては、心が頭であり、体が肉である。

私たちは彼のからだの肢体であり、その肉と骨なのです。それゆえ、人は父と母を離れ、妻と結ばれ、二人は一体となるのです。これは大いなる奥義です。私はキリストと教会について語っているのです。エフェソの信徒への手紙 5:30-32

第七の御使いの吹き鳴らしが、神の奥義を完成に至らせる業の開始を画したとき、ヨハネが測るべきであった神殿は神の神殿であった。だが、人の神殿は神の神殿のかたちに似せて造られた。両者は相互に代用しうる象徴である。モーセが四十六日の間、山にいたとき、彼は地上の幕屋を建て起こすにあたって用いるべき型を示された。その型は天の神殿から取られたものであった。

キリストは天の神殿であり、肉となって現れた。人間はその似姿に創造されたので、彼は人間の神殿の型を表している。このため、人間の神殿の型は46本の染色体によって表されている。

神殿は、預言的には相互に入れ替え可能である。したがって、ヨハネが測るように告げられた神殿は、外庭のない二つの区画だけで構成されていた。第一の区画は、人間の神殿、すなわち教会（花嫁）、国、体、つまり肉を表す。第二の区画は、神的な神殿、すなわち花婿、王、頭、つまり思いを表す。終わりの日に十四万四千のために成就する永遠の契約の約束は、エゼキエル書三十七章の二本の棒によって示されてきた。それは、二つの区画から成るヨハネの神殿によっても示されてきた。さらに、信者のうちにあるキリストの奥

義、すなわち栄光の望みについてのパウロの具体的な定義によっても示されてきた。

十四万四千人を封印する業とは、神性と人性を永続的に結合させる業である。その業は、第七のラッパが吹き鳴らされる間に成就する。その結合は、聖書において、行に行を重ねるように、多様な仕方で示されている。この業を神学的用語で言えば、義認と聖化の業である。義認は、われわれの身代わりとしてのキリストの業であり、聖化の業は、われわれの模範としてのキリストの業である。義認は天の御国への権利を表し、聖化は天の御国にふさわしい適性を表す。これら両方の業は、聖霊の臨在によって信徒にもたらされる。その業は、永遠の契約に受け入れられた者たちの心と思いに神の律法が書き記されることとして表されている。

「心」は、頭が位置する神殿の一室を表している。心はいわゆる高次の本性を指し、これに対して肉は低次の本性である。心は私たちの思考によって表され、肉は私たちの感情によって表される。

多くの人が、無用の不幸を味わっている。彼らは心をイエスから離し、あまりにも自分自身に向けてしまう。小さな困難を大きくし、落胆を口にする。彼らは、神の摂理について無用に嘆き不平を言うという大きな罪を犯している。私たちが持っているすべてのものも、私たち自身が何者であるかということも、すべて神に負っている。神は、ある程度ご自身がお持ちのものに似た能力を私たちに与えておられる。そして私たちは、自分を喜ばせ高めるためではなく、神の栄光を現すために、これらの能力を熱心に伸ばすべきである。

私たちは、神への忠誠から心をそらされることを許してはならない。キリストによって私たちは幸せでありうるし、そうあるべきであり、また自制の習慣を身につけるべきである。思いさえも神の御心に従わせ、感情は理性と信仰の支配のもとに置かなければならない。私たちの想像力は、抑制や訓練の努力もなしに思うままに暴走させてよいものとして与えられたのではない。思いが誤っていれば、感情も誤る。そして、思いと感情が合わさって道徳的品性を形作る。キリスト者として私たちは思いと感情を抑える必要はないのだと決めてしまうとき、私たちは悪しき天使の影響下に置かれ、彼らの臨在と支配を招き入れることになる。もし私たちが自分の衝動に屈し、思いを猜疑、疑念、不平の流れに乗せてしまうなら、私たちは不幸になり、私たちの生涯は失敗に終わるだろう。Review and Herald, 1885年4月21日。

思考と感情が結び合わさって道徳的品性を成す。私たちの品性は、低次の性質と高次の性質から成り、精神は高次の性質である。精神の思考が聖化されるなら、私たちの感情も聖化される。というのは、私たちの人性を構成する二つの性質のうち、精神がより高次の統御的性質だからである。私たちの存在の一部として備えられた「能力」は、「ある程度」キリストが所有しておられるそれらに類似している。私たちはキリストの御像にかたどって造られたのであり、また、それらの「能力」を「発達させるために熱心に努めるべき」である。

高次の本性、すなわち人間の精神に属する能力は、判断力、記憶力、良心、そしてとりわけ意志である。

多くの方がこう問いかけています。「どのようにして自分を神にゆだねればよいのでしょうか。」あなたは自分自身を神にささげたいと望んでいますが、道徳的な力が弱く、疑いの奴隷となり、罪の生活で身についた習慣に支配されています。あなたの約束や決心は砂の縄のようです。思いも、衝動も、愛情も自分で制御できません。自らの約束を破り、誓いを反故にしてきたという自覚が、自分の誠実さへの確信を弱め、神は自分を受け入れてくださらないのではないかと感じさせます。しかし、絶望する必要はありません。あなたが理解すべきなのは、意志の真の力です。これは人間の本性における統御の力、すなわち決断し、選び取る力です。すべては意志が正しく働くことにかかっています。神は人に選ぶ力を与えられました。それを用いることは人自身に委ねられているのです。あなたは自分の心を変えることはできませんし、自分の力でその愛情を神にささげることもできません。しかし、神に仕えることを選ぶことはできます。あなたは自分の意志を神にささげることができます。そうすれば神は、みこころにかなって望み、また行うよう、あなたのうちに働いてくださいます。こうしてあなたの全存在はキリストの御霊の支配のもとに置かれ、あなたの愛情はキリストに集中し、あなたの思いはキリストと調和するようになります。

善さや聖さを求める願いは、その限りにおいては正しい。しかし、そこで止まってしまえば何の役にも立たない。クリスチャンになることを望み、願いながらも、滅びに至る者は多い。彼らは自分の意志を神に明け渡すところまで至らない。彼らはいま、クリスチャンになることを選ばない。

意志を正しく働かせるなら、あなたの人生はすっかり変えられうる。意志をキリストに明け渡すことによって、あなたは、あらゆる支配と権威にまさる力と結び合わされる。あなたは上からの力によって堅く保たれ、このように神に絶えず身を明け渡すことによって、新しい生活、すなわち信仰の生活を生きることができるようになる。Steps to Christ, 47, 48.

意志の力は人間本性における「統治権能」であり、その統治者は、「一切の支配と権威にまさる力」と結び合わされている人間の神殿の一室に座している。人間の神殿において神性と人性の結合がなされる場所、そこが靈魂の城砦である。すべての人は城砦を有し、それはキリスト、あるいはキリストの大敵のいずれかに占められている。

キリストが魂の城砦を占められるとき、人は彼と一体となる。キリストと一致を保ち、心の座に彼を戴き、その命令に従う者は、悪しき者の罠から安全である。キリストに結ばれて、彼はキリストの恵みを自らに集め、魂を彼に勝ち取るために、自らの力と能力と権能を主にささげる。救い主と協力することによって、彼は神が働かれる器となる。こうしてサタンが来て魂を支配しようとするとき、キリストが彼を武装した強者よりも強くしておられることを、サタンは見いだす。Review and Herald, 1899年12月12日。

魂の城砦は、人間の心と思いである。新しい契約における約束は、信仰者に対する三つの主要な約束を指し示している。第一に、信仰者には住まう地が約束されている。これは、アダムとエバにとってのエデンの園がそうであったのと同様であり、このエデンの園はさらに、神が古代イスラエルと結ばれた契約における約束の地を象徴し、さらにまた、それは靈的イスラエルにとっての靈的な栄光の地を象徴していた。そして、これら三つは

いずれも、彼が打ち勝たれたように打ち勝つ者たちのための新しくされた地の約束に、行に行を重ねて証言する。

アダムとエバが罪を犯したとき、彼らは「七つの時」の間エデンの園から「散らされ」、七千年の後に地は新たにされ、エデンの園は回復される。古代イスラエルが「七つの時」の間散らされることは、アダムとエバが散らされたことによって型示されていた。契約は住むべき地を約束しており、それは回復されたエデンの約束であった。聖所と軍勢が踏みじられることは、アダムの罪に始まり人類のうちで漸次的に激化していく罪を表している。

契約の他の二つの約束は、忠実な者たちが新しいからだと新しい思い、すなわちキリストの思いそのものを受けるということである。からだは肉であり、低い本性であって、キリストとの関係においては教会を指す。思いは高い本性であり、ホワイト夫人が「魂のとりで」と呼ぶものである。パウロは、私たちが福音の条件を受け入れて義とされるその瞬間に、キリストの思いを受けると明確に教えている。また、再臨に至るまでは、新しく栄化されたからだを受けるとはしないと教えている。

見よ、あなたがたに奥義を告げます。私たちは皆が眠るわけではありませんが、皆が変えられます。たちまち、目の瞬きの間に、最後のラッパとともに、ラッパが鳴り、死者たちは朽ちない者としてよみがえり、私たちも変えられるのです。というのは、この朽ちるべきものは朽ちないものを着なければならず、この死ぬべきものは不死を着なければならぬからです。こうして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」という書かれている言葉が実現します。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。よみよ、おまえの勝利はどこにあるのか。死のとげは罪であり、罪の力は律法です。コリント人への第一の手紙 15章51-56節。

ヨハネが、そのような誤った教えを信じる者を反キリストだと特定すると述べるある教義は、キリストは、アダムの罪以後人類に及び始めた罪の影響下にある身体を決して受け入れなかったと主張する。

また、イエス・キリストが肉となって来られたことを告白しない霊は皆、神からのものではありません。これは、あなたがたが来ると聞いていた反キリストの霊であり、今すでに世にあります。第一ヨハネ 4:3

「無原罪の御宿り」を教えるバビロンの酒（反キリスト）の教えは、マリアは罪以前のアダムとエバのように完全な者とされたと主張し、イエスの誕生が、神性（聖霊）と完全な人性（マリア）による受胎に基づくものとなるためだという。「無原罪の御宿り」という誤った教義が扱っているのは、イエスがマリアの胎内でいつ受胎されたかではなく、マリアがアダムとエバの完全さを備えてどのように受胎したかである。人を贖うために来られたとき、キリストがご自身にお取りになった肉体が、遺伝の影響を帯びていない罪のない肉体であったと示唆することは、反キリストの教えである。

多くの人を惑わす者が世に出てきており、イエス・キリストが肉となって来られたことを告白しない者たちがいます。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。ヨハネの手紙第二 1:7

キリストが復活されたとき、主は栄光のからだをお持ちであったことを、靈感は明確に示しています。主の復活は再臨のときの義人たちの復活を表しており、そのとき私たちは新しいからだという契約の約束を受けます。

キリストが御父の御座に昇られる時が来ていた。神なる征服者として、彼は勝利の戦利品を携えて天の宮廷へ帰ろうとしておられた。ご自身の死に先立って、彼は御父にこう宣言された。「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げました。」ヨハネ17:4。復活の後、彼はしばらくの間地上にとどまり、弟子たちが、よみがえり栄光を受けた御体の彼に親しむことができるようにされた。今や別れの時であった。彼は、ご自身が生ける救い主であることを確証なさった。弟子たちはもはや彼を墓と結びつけて考える必要はなかった。彼らは、天の宇宙の前で栄光を受けておられるお方として彼を思うことができた。The Desire of Ages, 829.

住むための地に関する契約の約束は、エデンが回復され、第一のアダムに属する人類の「七たび」（七千年）の離散が終結し、地が新しくされるときに成就する。新しく栄光に輝くからだに関する契約の約束は、再臨のとき、一瞬のうちに与えられる。

ベツレヘムの物語は尽きることのない主題である。その中には、「神の知恵と知識の富の深さ」が隠されている。ローマ11:33。私たちは、天の御座を飼い葉桶に、また、あがめる天使たちの交わりを厩舎の獣たちにお替えになった救い主の犠牲に驚嘆する。その御前では、人間の誇りと自分で足りるという心は戒めを受ける。しかし、これは彼の驚くべきへりくだりの始まりにすぎなかった。たとえアダムがエデンで無垢のうちに立っていた時であっても、神の御子が人間の本性をお取りになることは、ほとんど無限の屈辱であったであろう。ところがイエスは、人類が四千年の罪によって弱められていた時に、人性をお受けになった。アダムのすべての子らと同様に、彼は遺伝という大いなる法則の働きの結果を受け入れられた。これらの結果が何であったかは、彼の地上の祖先の歴史に示されている。彼はそのような遺伝を帯びて来られ、私たちの悲しみと誘惑を分かち合い、罪のない生涯の模範を示すためであった。『The Desire of Ages』、48.

人が福音の求めるところに応えると、その時その場で新しい思い、すなわちキリストの思いを受ける。しかし、身体、すなわちパウロが肉とも呼ぶものが変えられるのは再臨の時である。感情から成る下なる性質は、回心の時に取り除かれるわけではない。品性の一部をなすその感情は、再臨まで残る。それらの感情は、ホルモン系に関連する情動系を表している。また、神経系に関連する感覚の働きをも表している。人間の下なる性質のうち感情と見なされるすべての要素は、基本的に二つの類に分けられる。一つは先祖から受け継いだ傾向であり、もう一つは自らの選択によって培われた傾向である。

遺伝的な傾向の中には、単に人間の造りの一部にすぎないものもあれば、悪に向かうものもある。養われた感情は、私たち自身の選択によって形作られるものであり、遺伝的な傾向は「遺伝の大いなる法則」によって受け継がれる。

イエスは、「人類が四千年にわたる罪によって弱められていたときに、人性をお取りになった。アダムのすべての子孫と同様に、偉大な遺伝の法則の働きの結果をお受けになった。これらの結果がいかなるものであったかは、彼の地上の祖先の歴史に示されている。

彼がそのような遺伝的素質を帯びて来られたのは、われわれの悲哀と誘惑を分かち合い、罪なき生涯の模範を与えるためであった。」偉大な遺伝の法則が四千年にわたって働いた結果を身に負いつつ、イエスは、ご自身の意志を行使して、常にそれらの傾向を支配下に置き、いかなる罪深い感情をも養うことに一度たりとも関与されなかった。

もしイエスが、アダムとエバが罪を犯す前のような人間の肉体を受け入れ、四千年以上にわたる墮落によって生じた人類の弱体化の結果を受け入れなかったなら、彼は、神の子ら一人ひとりがいかにして打ち勝つことができるかの模範を示すことにはならなかっただろう。

次の記事でこの研究を続けます。

多くの人は、キリストとサタンのこの闘いは自分の人生に特別な関わりがないと見ており、そのため彼らにとってはほとんど興味の対象にならない。しかし、すべての人の心の内で、この争いは繰り返されている。神に仕えるために悪の陣営を離れる者が、サタンの攻撃に遭わずに済むことは決してない。キリストが退けられた誘惑は、私たちが抗うことをとても難しいと感じる類のものであった。彼の品性が私たちのそれよりはるかに優れている分だけ、それらの誘惑はいつそう激しく彼に迫った。世の罪の恐るべき重みをその身に負いながら、キリストは、食欲の誘惑、世を愛する誘惑、そして思い上がりへと導く虚栄の誘惑に耐え、それらに打ち勝たれた。これらこそ、アダムとエバを打ち負かした誘惑であり、また私たちをもいともたやすく打ち負かすのである。

サタンは、神の律法は不当であり守ることはできないという証拠として、アダムの罪を挙げていた。私たちと同じ人間性において、キリストはアダムの失敗を贖うはずであった。だがアダムが誘惑者の試みに遭ったとき、彼には罪の影響が何一つ及んでいなかった。彼は心身の活力を完全に備え、完全な人間としての力のうちに立っていた。彼はエデンの栄光に囲まれ、天の存在たちと日々交わりを持っていた。サタンと対峙するために荒野に入られたとき、イエスはこのような状態ではなかった。四千年の間、人類は体力、知力、そして徳性において衰えてきており、キリストは墮落した人類の弱さを身に負われた。このようにしてのみ、彼は人間をその墮落のどん底から救い出すことができた。

多くの人は、キリストが誘惑に屈することはあり得なかったと主張する。もしそうなら、彼はアダムの立場に置かれることはできなかつたし、アダムが勝ち得なかつた勝利を彼が勝ち取ることもできなかつただろう。もし私たちが、どんな意味においてもキリストよりも厳しい闘いをしているのだとしたら、彼は私たちを助けることができないことになる。しかし私たちの救い主は、人間性を、そこに伴うあらゆる弱さとともにお取りになった。彼は、誘惑に屈する可能性を伴って、人間の本性をお取りになった。私たちが耐えなければならないことで、彼が耐えていないものは何ひとつない。

キリストにおいても、エデンにおける聖なる始祖の二人の場合と同様に、食欲が最初の大いなる誘惑の土台となった。破滅が始まったまさにそのところで、わたしたちの贖いの業も始まらねばならなかつた。アダムが食欲の放縦によって倒れたように、キリストは食欲を否むことによって打ち勝たねばならなかつた。「そして、四十日四十夜の断食を終えられたのち、イエスは空腹を覚えられた。そこで、誘惑者が御もとに

来て言った、『もしあなたが神の子であるなら、これらの石に命じてパンとならせよ。』しかし、イエスは答えて言われた、『「人はパンのみによって生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる」と書いてある。』」

アダムの時代からキリストの時代に至るまで、自己放縦は食欲と情欲の力を増大させ、ついにはそれらがほとんど無制限に人を支配するまでになっていた。このようにして人々は墮落し、病んでいた。自力ではそれを克服することは不可能であった。人類のために、キリストは最も厳しい試練に耐え抜くことによって勝利を収められた。私たちのために、キリストは飢えや死にも勝る自制を行使された。そしてこの最初の勝利のうちには、私たちが暗黒の勢力と争うあらゆる戦いに関わってくる他の問題も含まれていた。The Desire of Ages, 117.